支那政府は日本の要求した二十一ケ條に對して山東問題を最も重要視し、最近の機會に於て日本政府に對し該條約の取消しを要求するならば……米國の輿論は擧げて公然支那の主張に贊成し、此汚穢なる密約の掃蕩を希望するであらう。かくして極東の平和は始めて保持され得るのである。

此二十一ケ條存在する限り日支關係の改革も親善も亦無效であつて、徒らに支那人の猜疑と怨恨を增すのみである。日本人は自由を愛する國民である、此努力を急務としなくてはならない。即ち日米提携を謀るのが第一の先決問題である。然らざれば米國は其の純潔を以て日本の伴侶となる事を希望しないのである。是れ二十一ケ條の廢棄が日支親善の爲めの唯一の要道たるを知るものであり、又一方面に於て日支親善を確立するならば、米國の輿論は必ず其方向に動き日米問題は容易に解決さるゝであらう」云々。

今杜威(ドーイ)博士の論旨を綜合して見るに

(1) 日本が東亞大陸に對して政治的、經濟的優越權を有するが如きは、實に將來世界大戰の禍根を培ふものである。

(2) 日本が米國に向つて攻勢的戰爭を開始するが如き事があれば、それは日本の滅亡を促進するものである。

(3) 日米問題の解決は日支の親善を圖るにある。

(4) 日支親善は日本が二十一個條の密約を撤廢するにある。

之を要するに極東問題の解決は、日本が支那に對して其侵略政策を放棄するにある。

第三章　日本人の日本の滿洲侵略論

第一節　滿川龜太郎氏の論調

△滿川氏の論文　日本人は滿洲を生存補充地卽ち「經濟的植民地」としてゐる。曾て生命を犧牲にし公理に違反して之を侵奪し、智力を竭して經營しをるものであるから、どうしてよく公法を踏み人道に顧みて旅大等の地を我國に還附する事が出來よう。故に日本人が旅大租借問題に對して持する論調は我國人と全然相反してゐる此れ誠に自然の勢である。茲に彼等日本人の論調に付て其重要なるものを擇び次に分述せんに

日本人滿川龜太郎氏は曾て『大陸政策の基調』なる一論文を雜誌國本に登載した。其第一節には日清戰爭の往時を論じ、第二節には遼東半島三國干涉の往事を述べ、第三節には露國の旅大

REEL No. 調-0103
0056
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

租借を敍し、第四節に於ては日本の旅大租借繼承を述べて居るが、これらは皆既往の事に屬するが故に詳細を論せず、第五節以下に於て始めて旅大租借地の還附問題に論及してゐる。茲に之を略述すれば

△二十一ヶ條問題　滿川氏曰く、支那の排日家は「日本の對支二十一ヶ條密約は、日本の强側壓迫によつて締結せられたもので當然無效に歸すべきものである」と云ひ、日本の輕卒なる愛國青年は之に答へて「明年卽ち民國十二年三月は關東洲租借期限の滿期である、支那は必ず我國に還附を迫るであらう、我國は當然速に其準備をなすべきである」と云つてゐる。

私は謹んで支那の排日家に告げん『所謂二十一ヶ條なるものは何處に存在するか』と又日本の愛國青年に告ぐ『租借期限は決して明年三月に終了するのではない』と。

所謂る二十一ヶ條なるものは日本が世界大戰に參加して獨逸の青島に於ける勢力を驅逐したる後、東洋の平和を確保し、日支共存の基礎を鞏固にせんが爲に大隈內閣が支那に對して要求した五つの條項である。然るに該條約は幾度か修正されて實際成立したのは僅に十三ヶ條に過ぎない。今仍ほ二十一ヶ條と稱するは實に我國を誣ふるものである。……之を要するに日本は該條約に依て旅順、大連並に南滿鐵道、安奉線の租借期限九十九ヶ年延長の權利を獲得したものである。該條約の南滿及東內蒙古に關する條約第一條中に「兩締約國は旅順大連の租借期限並に南滿鐵道及安奉鐵道の期限に關し九十九ヶ年に延長するを得」とあり、旅大租借期限は此延長に依り民國八十六年卽ち一九九七年に至つて始めて滿期となる。南滿鐵道の還附期限は民國九十一年（卽ち西紀二〇〇二年）に至つて始めて滿期となり、安奉鐵道の期限は民國九十六年（西紀二〇〇七年）に至つて始めて滿期となるのである。此等の期限は中華民國外交總長陸徵祥と日本日置公使との間に明定されたものである。右の如く日支條約が既に確定した以上は明年三月は斷じて還附期限ではない。

△滿洲問題は日支親善を結ぶの關鍵である　曾て支那の國會議員は二十一ヶ條の無效を宣言した事があり、黎元洪大總統も亦滿洲を以て日支間のアルサス・ローレンであると云つた。吾人は屢々此言を聞いて可笑しく思つた。夫れ滿洲は何故に日支間のアルサス・ローレンであらう乎。旅大の租借期限延長等は乃ち支那の承諾を經たものである。何が故に無效なりと謂ふのであるか。若し後になつて自己の不滿足の爲に勝手に國際條約を破棄し得るとすれば、則ち列國間に締結された一切の國際條約は悉く無效を宣言する事が出來るのである。世間に此の如き理屈が存在するであらう乎……日本は日本自身の國防上並に東洋平和の維持の爲に滿洲を我大

REEL No. 調-0103
0057
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

陸政策の基調としなければならぬ事は絲毫も變更する事の出來ないものである。……日本は支那が歐米列强の壓迫を受くる事恰も我國昔年の如きものがあるに對して、同情の念禁ずる能はず、支那が速に統一を行ひ鞏固なる青年支那（ヤングチャイナ）を建設することを衷心より希望する。支那の統一は實に亞細亞復興の第一歩である。此時に當り日支兩國が始めて能く眞正の提携を進める事が出來得るならば、滿洲なるものは實に日支兩國相互の親善上重大なる關鍵をなすものである。

今滿川氏の意見を總括するに次の二點に歸してゐる。

(1) 二十一ヶ條は我國（支那）が正式に承諾したる條約であつて、日本の獲得したる一切の權利に對しては撤廢の餘地が無い。

(2) 滿洲は日支親善の餌である。日本が東亜の平和を保持するが爲には是非滿洲を根據地としなければならぬ。

斯の如き論調は只日本人が之を是と認むるのみで、我國民としては斷じて承認出來ない事である。故に余は今最も忠實なる言を以て日本國民に警告する。『倘し强迫によつて締結した二十一ヶ條を撤廢せず久しく租借する旅大等の租借地を還附しなければ、日支間には親善の言ふ可

きものが無い、只最後の努力を盡すのみである』と、此の如き心情は固より余個人の狹隘なる愛國心よりして言ふのではなく、凡そ中華民國人として些かたりとも國家觀念を有する者ならば皆此言を至當とし憤慨するであらう。

第二節　綾川武治氏の論調

△遼東回收の理由　綾川武治氏は、嘗て遼東回收問題の徹底的對策なる一論文を著はし、日支滿蒙問題を評論した。其大要は次の通りである。

氏曰く、支那の遼東回收論の根據は民國四年の日支二十一ヶ條々約の無效主張にあり、其の理由は二つある。

(1) 該條約は最後の通牒により强迫せられて定めたるものなる事。

(2) 未だ國會の承認を經てゐない事。

此の二つの理由は皆不充分で最も反駁し易いものである。

(1) 若し條約の形式如何を問はず凡て强迫により結んだ條約を皆無效に歸すれば、則ち領土變更に關する大多數の條約は悉く破棄されねばならぬ。斯の如くであるならば世界は必ず混亂狀態に陷るであらう。且つ戰爭の結果定められた所の領土割讓條約と最後の通牒に依つて定

REEL No. 調-0103
0058
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

められた條約とを比較するに二者强迫の程度孰れを大となし、孰れを小となすか三歳の兒童と雖も亦能く之を辨別する事が出來る。……果して然らば則ち阿片戰爭に依つて英國に割讓した香港も亦當然回收を提議されねばならぬ。若し單に最後の通牒なる强迫手段に依つて締結された條約を無效と爲すならば、日本は宜しく一九〇五年の遼東還附の日淸條約をも亦無效に歸さねばならぬ。若し然らば日本は先づ支那の主張を承認して二十一ヶ條を無效と爲し然る後支那の主張する理由を以て一九〇五年の遼東還附日淸條約を廢棄し、遼東半島の再還附を主張すれば、卽ち遼東半島の再還附に依つて我が地下の亡靈を慰め得、又我が祖國發展の基礎をも植え付ける事が出來る。

(2) 若し一九二二年十二月一日中華民國衆議院を滿場一致にて通過した「民國四年五月の日支二十一ヶ條協約無效宣布諸議案」の「夫れ國會は條約同意權を有す、若し條約に對し國會の同意を經ざれば則ち形式不備にして當然無效なり」との言を引用せば今、日支那に於て有效の諸條約、諸協定は果して悉く國會の同意を得て形式の完備してをるものであらうか、若し二十一ヶ條のみに對して、其形式不完備を唱へ無效を宣するならば這は甚しき偏見である。又國民運動及び排貨運動によつて二十一ヶ條撤廢の目的を遂ぐる手段とするならば、此れ亦

一種の挑戰行爲である。もし日本が是れに屈從して條約を改訂せんか、日本も亦同一理由で强迫により改訂した條約の無效を宣言すべきである。此の如くならば則ち二十一ヶ條々約は無效としても宜しい。因果は廻る小車の如し、どうして此儘で濟まうか。黎元洪は嘗て日本新聞記者團に會見して、關東州とアルサス・ローレンの二州とを同視し、戰爭によつて獲得した領土は永續し能はぬものであると言つたが、此れは實に基礎の薄弱なる僻論である。此樣な說を抱く人は嘗て世界歷史の一頁をも讀んだ事があるかどうか。實に愚も亦甚だしいと言ふ可きである。

△滿蒙維持の理由及意義　支那が旅順、大連等の還附を主張する理由に對しては已に上述の如く反駁したが、畢竟それは表面の理由であるから、吾人は更に根本的の理由を討究し此問題に對して徹底的の解決を下さなければならぬ。

此理由を知らんとすれば、先づ日露戰爭の眞義を闡明して始めて其根據が得られる。

吾人は先づ問はん、何故日本は存亡を願す同胞の鮮血を流して日露戰爭をしたであらうか。蓋し滿鮮の地にして若し第三國の手に移るとせんか則ち日本死活の運命は其掌握する所となるのである。然らざれば何が爲に莫大の國帑を費やし幾多の生命を犧牲にして迄敢へて大陸軍國の

REEL No. 調-0103
0059
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

強露と乾坤一擲の決戰を演じたであらうか。是れ實に支那及滿洲、朝鮮を保全し、日本の存在を解決せんが爲の死活問題であつたのである。

然るに當時の支那は自ら暴虐無道の露國の侵略を防ぐ能力がなかつたから、日本は日本を防護し、且支那及亞細亞を防護するが爲に此乾坤一擲の決戰をなすことを憚らなかつたのである。

此義俠的日本の決戰によつて支那は幸ひに、其北部の領土を保全する事が出來、唯僅に淡路島大の滿鐵沿線の土地及び關東州を日本に租借せしめて其報酬としたに過ぎぬ。……其後日本は常に支那及亞細亞北門の防護者を以て自ら任じて居る。……勞農政府は滿蒙を窺窺する意圖を有してゐる。第三國の勢力にして一度滿蒙の地に侵入せんか、日本と支那とは必ず其脅威を受けるのである。試みに之をアジヤ洲及アフリカ洲の殖民史に徵せんか、歐米列强の態度が如何に惡辣陰險であつたかがわかる。此種惡辣陰險の魔術は印度に於ては則ち回教徒と印度教徒との爭に利用して坐ながら漁夫の利を占め、支那に於ては支那自身或は日支間の爭鬪に利用して漁夫の利を得んと窺ふて居る。此魔術を展げて勞農政府と結托すれば滿蒙は必ず分割されるであらう。果して右の如くならば、日本は必ず再び露國と兵を構ふるに至り、日本は復び興廢の渡渦の中に陷る。もし日本が敗北すれば支那は必ず分割されて歐米列强の爲すが儘になるであらう。して見れば滿蒙維持の責任は當然日本に在ると云ふ事が出來る。

日本がもし關東州及滿蒙の權利を放棄すれば、是れは日露戰爭の無意義な事を承認するものである。此の如くならば滿洲に血を流し骨を埋めた我同胞は全く犬死したも同樣である。日本は國防上の必要の爲に同時に又義俠的精神を以て國運を賭する大戰を敢行し、支那の爲めに强露を驅逐し滿蒙を奪回し、其の獨立を保全したのであつて、滿蒙の獲得は實に日露戰爭の代償である。……若し日本が滿蒙より撤退すれば第三國の勢力は必ず侵入する……現在支那が實力を以て滿蒙を防護せんとするは恰も驢馬を以て獅子を防ぐと同樣で何人も皆其不可能を知る。然らば則ち滿蒙の事は必ず之を日本に委すべきである。

予は綾川氏の意見を總括して見て、大體次の諸點にあると思ふ。

(1) 日露戰の意義　是は日本が國防の必要並に支那を保全する爲に露國を驅逐せんとして起つたものであるといふが、それは畢竟手前勝手の議論で、吾國民は幼童でない限り其の是非を辨じない譯には行かぬ。

(2) 日本の旅大租借は乃ち日露戰爭の報酬であると、噫是れは馬賊が人の財を强奪して是は主人よりの報酬だと云ふも同じだ。

REEL No. 調-0103

0060

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

(3) 綾川氏は我國が旅大還附を主張する理由を反駁するが、それは滑稽家の詭辯を弄するが如きものであつて何處に眞理があらうか。

(4) 綾川氏は久しく旅大等の占有を主張してゐるが、其根本の理由は全く强權者の恫喝に過ぎない。支那は世界に於ける獨立國たらんと欲するものである。決して日本の好意を承認する事が出來ない。

第三節　棟尾松治氏の論調

△棟尾氏の代表言論　大連遼東新報記者棟尾松治氏は支那通新聞記者である。何時ぞや遼東新報紙上に滿洲經略論を發表して曰く「奉天、吉林、黑龍江の三省は多くは直隸、山東二省民の移住地であつて、滿洲は恰も支那本部の植民地化したるが如く、文化並に生活程度の最も低級なる支那勞働者が滿洲に移住し來つて、其低廉なる勞力を供給し財の獲得に努力するのである、日本の移民が果してよく彼等と經濟的に對抗し競爭し得るか如何かは甚だ疑問である。過去の經驗に依つて觀れば、日本の移民は支那より移住した勞働者に比べて頗る劣つてゐる。是れは日本と支那との文化、生活、思想上の懸隔から生ずる差異であつて、恰度米國に於ける日本の移民勞働者が米國の勞働者を壓倒するが如くに滿洲に於てはその反比例をなすのである。故に

日本の滿洲移民の資格は必ず資本を有する者か或は特別の技術を有する者に限る。要するに滿洲の地域は日本の爲の移民地ではなくて實は日本に必要なる物資の生産供給地なのである。日本の滿洲經營は不自然なる罪惡行動ではない。日本の資本と日本の文化とに依つて未開拓地の滿洲を開發し其天然の資源を人類生存の資に供せんとするのであつて、實に人道上の正義に屬する。故に日本及日本人は宜しく此人道上の正義を努力發揮して其理想に突進すべきであり、日本の滿洲經營は此精神に依つて飽くまでも其目的を貫徹されん事を祈る」と

第四節　予の日本の滿洲侵略論

△棟尾氏の意見に對する批評　世の中に自身竊盜して自ら其非理違法を認める者があらう乎。日本人は其滿洲侵略を是なりと主張するが事は恰度夫れである。學者若し公理に據つて立論すれば必ず日本人を斥けて非と爲すであらうが、若し强權を以て立論すれば或は日本人を是と認むるであらう。余は茲に予個人の公平なる意見を以て松尾氏の意見を略評する

氏曰く「日本の資力と文化とを以て滿洲の富源を開發し人類生存の資に供するは、不自然の罪惡行爲に非ずして人道上の正義に基くものである」と吾人が此の如き行動を人道上の正義なりと認むるならば、凡そ侵略政策を抱く帝國主義者は皆人道正義の國家に屬することゝなる。若

REEL No. 調-0103
0061
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

し然らば則ち世界は强者の世界、盜賊の世界、競爭の世界であつて公理、人道、正義、平和なるものがないわけである。是れ各種の平和會議、聯盟會議なるものも皆世を欺く言であつて所謂る民族自決主義は終に行ふ事が出來ないのである。然らば日本の此種の人道主義は何故に之を天然豐饒なる米國に行つて行はないのかと云へば、則ち辯解して曰く「米人は自ら開發する事が出來る」と何故土地廣闊なる西比利亞に之を行はぬかと言へば則ち辯解して曰く「露國の强を畏るゝ耳」と。何故之を南米に行はざるやと言へば「各國皆外國の援助（米國）を有する」と云ひ、何故之を支那に行ふやと問へば「支那の衰弱は與し易き故のみ」と云つてゐる。

△我が意見の一啓　嗚呼此等の人道主義は特に强權主義の變名である。日本にして若し堅く持して改めなければ將來世界大戰の導火線は必ず日本より起るであらう。獨逸の强を以てしても日本の樣に高く出ながら尙蠻橫なる强權主義を完成することが出來なかつたのである。蓋爾たる貧乏の日本が蛇の象を呑まんとするが如き人道主義を肆にせんと欲すれば其禍害は必ず獨逸より更に甚しいものがある。日本人は此事が判らないのか。

日本人曰く「日露戰爭は日本が國防の必要及義俠の精神に基いて支那の爲に盜賊を驅逐し東亞の爲に平和を謀つたものに過ぎない。此に因つて旅順大連等の租借地を獲得するは當然の報酬

ではなからうか」と夫れ自國の國防の爲に、他國の領土を戰場となすものが世界にどれだけあらうか。日本が支那の爲に露國を驅逐したと云ふが如きは、恰度大泥棒が人の妻を横領した處或人が其泥棒を驅逐したと云つて其人妻を獨占するが如きものである。之をしも義俠と謂ふ事が出來ようか、抑も亦大泥棒と云ふべきであらうか。我國の義俠傳中の人物に就いて求めても此の樣な腐敗した人物はない。之れは恐らく日本式の義俠であらう。

日本の滿洲侵略の事實は、日本人が如何に言葉巧みに辯解するとも、吾人は弱者を欺く非理强暴の行動であると確認するものである。二十世紀以前の歷史に就て觀ても亦多く見られない事である。人は多く英人の印度を亡ぼし、佛人の安南を亡ぼしたるを云ふが、予は印度を亡ぼす者は印度人にして英人に非す、安南を亡す者は安南人にして佛人に非すと云ふ者である。然るに米國は印度よりも富み、日本は安南よりも小さいのに何故に英佛の爲に併呑されなかつたであらうか。是れ其國が强く國民の意氣の壯なるに因るものである。若し然らば日本の滿洲侵略は日本が滿洲を侵略するのではなくて、支那が日本に抵抗防禦し得ないのである。故に予は日本の滿洲侵略を恨まない。支那が其領土を保護する能はざるを恥づるものである。若し支那の國勢にして、英米の如くであるならば、日本は之を崇拜するは勿論敢へて我國尺寸の地も妄りに

REEL No. 調-0103
0862
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

侵さんとはしないであらう。此に於て支那人たる者は自ら奮起すべきを知らなければならぬ。日本の滿洲侵略政策は從前政略的欲望に基き、强硬政策を執り實際滿洲併呑の野心を有するものであつたが、近來は列國の干渉に畏れて横呑の嚥下し難きを知り遂に經濟的欲望に基いて柔和政策を執り僅に滿洲物資の利益を得るのみで足れりとし必ずしも其領土を奪はんとはしてゐない。然るに强硬政策は武力を以て國を滅す舊式法であるから毒の樣に防ぐ事は容易であるがかの柔和政策は經濟的に國を滅す新法であつて蜜の如く溺れ易いのである。　我國民たる者は覺醒しなければ驚ては必ず其術中に陷り無限の禍害を蒙るであらう。著者は此を懼るるが爲に特に日本の滿洲侵略の史實を後編に詳述することゝした。其經濟界の詳しい記事を觀れば本書の意義が窺ひ知られるであらう。

第三編　滿洲の外交史

第一章　露國極東侵略以來の滿洲

第一節　我國諸民族の滿洲に於ける競爭史

鮮卑族は東漢の初めより漸次南下し始め桓帝の時に至つて檀石槐なる雄酋が出て四方を侵略し、東は哈爾賓の西より西は天山附近に迄達し、横に內外蒙古に跨る一大國家を建設した。靈帝の時檀石槐死して國土分裂し國勢日に衰へたが、晉の初め禿髮氏、乞伏氏、拓拔氏、宇文氏、慕容氏、段氏等が次第に出現した。中にも慕容、拓拔の二氏は最も著名であつた。慕容護は始めて國を棘城（今の錦縣義縣の西北）に立て數代傳へて慕容廆に至り英邁衆に勝れ曾て東は遼東を侵し北は夫餘を改めたが後に晉に降り晉の武帝は彼を鮮卑都督とした。嗣で東晉の初め平州の刺史及宇文氏、段氏を破つて遼東を取り捷を晉に獻じて平州（奉天及朝鮮の西境）の牧遼東公に封せられ東北に雄を稱へたが、其子慕容皝立つに及んで頗る乃父の風あり、晉は鎭東大將軍遼東公に任命したが、後に自ら燕王と稱するに至つた。歷史上前燕と稱するは則ち之である。皝は南は石虎を敗

REEL No. 調-0103
0063
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/